

「何も無い空」

竹下太崇

舞台から降りていくよう紫陽花は花の光を消してゆきます

柔らかな雨が降ったその後は命が枯れる匂いがただよう

新緑の木の根元から海藻が死体になった匂いがしけり。

人生に追われて朝の四時半になる。ところでトマトは八月の香り

八月はトマトを潰したにおいする優しきなんてほんの瞬間

改札の残金不足が光ってて優しさだけじゃ許されなかった

お金さえ持っていれば人々の素性を問わない駅の改札

ぬばたまの深夜3時の帰り道「暗いね」「暗いよ」「日本の未来は」

太陽が昇る時間と同じぐらい布団を出るには手間暇がい

る
朝焼けにはじき出された暗闇は涙袋に居座り続ける

永遠の愛をあなたに伝えても眠ってしまったえば閉じる一日

歯ブラシを終えた後のキッチンに最高深度の暗闇がある

夏の夜の湿気の重さに耐えかねて自由落下していく暇

七色のTシャツ着ても店員の瞳の中には白黒の僕

天上にピースを掲げて校庭に集うたんぼぼ色した帽子

蝉みたく空の色が青色で無くなる時まで眺めていたい

洗われた大地を歩くお前にはドライヤーのごと光よそそげ

愛情の生まれるところにふれるぐらいウイルスだって許されるはず

食卓のウニを逆さに見てみればアラビアからの風が吹き出す

人間が休止しているテレビにはカイロの音が混じっていたり

紫煙は咳を侵すらし。メーターのEを指してるエンジンの音

溶解炉から出てきたガラスの冷たさで棺の中に横たわる父

人の熱で緩んだ毛穴を引き締める火花が消えたぬばたまの空

録音した声のような違和感を背負って明日も大学に行く

違和感をぬぐい切れずに生きている。雨雲の上は何もない空

娘より年下の子を愛したりイカロスが見た快晴の空

通販で買ったスカートを自慢する君の輪郭「余」の形になる

彼(元)の匂いがついたTシャツを洗濯に出す。空高くなる。

肉眼が捉える高さに限りあり。それより高く燃え尽きる星

爪切りが作り出したる三日月を迷うことなくゴミ箱に捨つ

ワンちゃんが悲しむ声に似た音で倉庫の錆びた扉が閉まる

テイラノサウルスの帰った痕跡 秋の終わりの楓の下道